4 若松島・中通島
（長崎県新上五島町）

五島列島B&B

個人客に特化し、「田舎の親戚宅」を思わせる体験事業

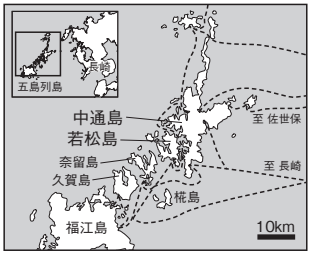
ライター　竹内　章

二〇一八年夏、長崎、熊本両県にまたがる「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産に登録された。

この世界遺産は一二資産で構成されているが、九州本土の西方、東シナ海に浮かぶ長崎県・五島列島の新上五島町にもその資産の一つがある。登録以降、町がメディアに取り上げられる機会も増えており、これに伴い島を訪れる観光客も増加傾向にある。

新上五島町内では、「世界遺産効果」を追い風とした観光客増を見越し、ゲストハウスなど宿泊施設の新設も相次いでいるが、この一〇年間、島の「体験型観光」を支えてきたのが、いわゆる「民泊」事業を展開する任意団体「五島列島B&B」だ。

今回は、島の活性化を目的に、気概あふれる六〇歳以上の女性らが中心となってスタートしたこの団体の現状や、これまでの歩みを紹介する。



若松島・中通島：五島列島の北部に位置する主要2島で、若松島の面積30.98km²、人口1,361人（平成30年11月末現在）。中通島の面積168.06km²、人口17,766人（平成30年11月末現在）。ともに複雑に入り組んだ海岸線をもち、豊かな漁場にめぐまれている。

地域活性化を掲げ、若松地区のメンバーで発足

新上五島町には、中通島と若松島を中心とする七つの有人島と、六〇の無人島がある。最も面積の大きい島が中通島。行政機能や商業施設が集積し、人口も多い。

町は二〇〇四年、五つの町（有川町、上五島町、若松町、新魚目町、奈良尾町）が合併する形で誕生したが、「五島列島B&B」は、旧若松町（若松島を中心とするエリア）のメンバーが核となり、二〇〇八年に発足した。

中通島ではなく、若松エリアの住民が主導したことには理由がある。

背景には、合併により人の流れが中通島に向きはじめた当

時の状況に加え、高齢化や人口減などが加速する地域の実情に、若松の住民が危機感を抱き始めていたことがあった。

実際、発足時の名称は「若松B&B」。その後、「五島」という名称が入っていた方が県外の人にはPR効果が大きいことや、若松エリアだけでなく新上五島町全体にメンバーを広げたいという思惑から二〇一二年、現在の名称に変更した経緯がある。

発足時、自宅を民泊の場として提供したのは、現在も会長を務める大坪鷹子さん（七六歳）ら女性五人で、メンバーの平均年齢は六〇歳を超えていた。

当初は民宿を運営する案も浮上していたが、規制が多く事務手続きも煩雑なうえ、多額の設備投資も見込まれたことから断念。その後、比較的「敷居が低い」民泊という制度があることを知り、行政も巻き込みながら設立にこぎつけた。

五島列島B&Bの大坪会長。

一口に「民泊」と言われるが、実際は「国家戦略特別区域（特区）」を活用したものや、旅館業法の許可がなくても宿泊サービスを提供できる「イベント民泊」など、さまざまな運用形態がある。

五島列島B&Bは「農林漁業体験民宿」、いわゆる「農泊」と呼ばれる旅館業法などの規制を大幅に緩和した運用方法を採用している。

農泊で営業許可を得る手続きは都道府県によって異なり、長崎県の場合、体験メニューに関する実施計画などを整備した「グリーン・ツーリズム（GT）等推進組織」という組織を立ち上げるか、もしくは既存の組織に加盟する必要がある。

五島列島B&Bの場合、町では初めての取り組みだったこともあり、若松のメンバーが独自に組織を立ち上げる形となった。

親戚の家のようなホッとできる場所を目指して

五島列島B&Bのコンセプトは、「田舎の親戚の家に遊びに来たような、ホッとできる民泊」。料金は、一泊二日（夕食、朝食付き）七五〇〇円、体験料はメニューに応じて二二〇〇～三五〇〇円となっている。

ホームステイのような感覚で、民泊先の家族と一緒にご飯をつくって食べたり、島の大自然を体感できるプログラムに参加したりと、一般的な旅行とは違った「交流」「体験」を満喫することができる。

メンバーは、お客さんに喜んでいただけるよう、県内外への視察や研修会にも積極的に参加。どうすればお客さんを楽しませることができるのか、研究を続けてきた。

二〇一八年末時点で、宿泊を受け入れている民家は若松

エリアを中心とする八軒。体験メニューは、島らしい魚釣りや磯遊び、かまぼこづくりをはじめ、特産品のかんころ餅づくりや農業体験など、興味に応じてさまざまなメニューを選択することができる。

一度利用した民家を何度も訪れる利用者も多い。大坪さんは「リピーターの方に『泊まるところはほかにもたくさんあるのに、どうしてうちばかり利用するんですか？』と聞いたところ『ここが一番いいから』と言われたこともあって……。ついついサービスしてしまいました」と目を細める。

長崎県各地で展開されている民泊事業は、修学旅行などの団体客を積極的に取り込もうとしているケースがほとんどだが、五島列島B&Bは個人客に特化していることが大きな特徴となっている。

もっとも、民泊を受け入れている民家数が少なく、全体としてのキャパシティーが小さいことを受けての現実的な戦略だったが、結果的に「気軽に申し込みやすい民泊」といった特色を打ち出すこととなった。

宿泊者数は、緩やかではあるが増加を続け、二〇一五年度のピーク時には年間約五〇〇人を記録した。

二〇一七年度からは、ホテルなど宿泊施設のオンライン予約を扱う大手サイト「Booking.com」でも予約が可能となり、外国人客も増加。島のインバウンド対策にも貢献しているようだ。

補助金に頼らず自己資金での組織運営

五島列島B&Bは発足後、組織強化や集客・営業などに活用できる「長崎県グリーンツーリズム促進事業費補助金」など公的支援策を活用した時期もあるが、二〇一三年度以降は、補助金に頼らない自己資金での組織運営を実現している。

新上五島町によると、長崎県内で補助金に頼らない運営を行っているのは五島列島B&Bだけとみられ、他地域から運営方法を視察に訪れるケースもあるという。

民泊の収益の一部を運営手数料として集め、事務費などに充てる仕組みを構築しており、ホームページの管理を委託している事業者への手数料や、事務局の通信費などに使用しているという。

その一方で、課題もある。

民泊を受け入れる家庭数が、多少の出入りはあるが立ち上げ時のメンバーからあまり増えていない状況が続いており、観光客の受け入れ人数が頭打ちとなっている。また、受け入れ先家庭の高齢化が進んでいる一方、あとに続く後継者が育っていない。

民泊を管轄する町農林課では「町にはリゾートホテルやビジネスホテル、旅館などもあるが、五島列島B&Bが事業を展開することで、観光客の選択肢が広がっている」と取り組みを高く評価。

課題に対しては「立ち上げメンバーの、当時の平均年齢

行政からのメッセージ

島人の暮らしや人柄がリピーターを増やす

長崎県は、同県のグリーン・ツーリズム推進協議会に加入している実践者組織が25団体あるなど、農林漁業体験民宿の登録軒数が全国でも多い地域である。その内、離島地域で活動する団体は7団体あり、新上五島町では唯一のグリーン・ツーリズム等推進組織である「五島列島Ｂ＆Ｂ」が農林漁業体験民宿を担っている。

設立当初の組織の名称は「若松Ｂ＆Ｂ」。これは旧5カ町合併に伴い、町内でも旧若松町から中心地区への観光客や人口の流動を懸念し、若松地区の地域活性化を第一の目的としたためである。会長の大坪氏らを中心に事業を計画し、組織立ち上げの前段階として若松地区住民や、町内の旅館業者への説明会などを開いた。

しかし、聞き慣れない取り組みに当時は「この島の宿泊業を圧迫するのではないか」など不安や否定する声も少なくなかった。それでも賛同してくれる協力者もおり、なんとか設立にこぎつけた。

当初の目標を、町内での認知度の向上・実践者の増加・修学旅行やこども体験ツアーの誘致としたが、計画的に町内の実践者数を増加させることができなかったこともあり、なかなか団体誘致に結びつかなかった。

私は平成24年度からこの組織の担当をすることになった。まずはじめに、情報発信の改善見直しを提案し、「自分が知らない土地へ旅行する際に、知りたい情報か」を基準に組織のホームページをリニューアルしたところ、全国から個人利用者の宿泊予約が増えてきた。

個人向けの体験民宿の需要の高まりを感じたため、ターゲットを小規模団体や個人客向けへと方向転換し、それに特化した体験メニューづくりや、他地域の体験民宿への視察研修を重ね、実践者個々のおもてなしの意識を高めてきた。

この時期に「若松という名称よりも五島列島の方が連想しやすいのでは」という理由から、現在の名称へ変更した。大坪氏らと相談した結果、「島の親戚のお家に遊びに来たような感覚を売りにしたい」という方向性にたどり着き、今の体制が出来上がった。

行政からの運営補助は平成25年度以降受けていないが、その頃から宿泊数は年々伸びている。最近では世界最大の利用実績を持つ宿泊予約ウェブサイトに登録したことにより、外国からの利用者も徐々に増えてきているようだ。

昨年世界文化遺産となった「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産の一つがある当町には、近年、従来の団体向けよりも個人向け旅行商品の需要が高まり、多様な形態の宿泊施設が求められている。その選択肢の一つを担う「五島列島Ｂ＆Ｂ」は重要な存在だ。

組織の担当となり、体験民宿に地域の特色を出すため、この地域の良さを一緒に模索してきたが、体験民宿を営む実践者の暮らしや人柄そのものが、人を惹きつけ、リピーターを増やしていることに気づいた。言葉が通じなくても体験民宿に宿泊する外国人がいるということもわかった。実践者の話を通じて世の中の宿泊動向に気づかされることも多い。

いつだったか「田舎じゃ同じような話題しかないのに、民泊を始めたことでいろいろな話が家に居るだけで聞けるのよ、そんな楽しいことないじゃない」と大坪氏が言っていたのが印象的だ。これからもこの組織が発展していけるよう応援していきたい。

（新上五島町農林課 主査　髙塚倫子）

が六〇歳を超えていたことを考慮すれば、それぐらいの年齢の方であっても十分に始められるということ。仕事を定年退職したような年代の方が、後継者として新たに民泊を始めてもらえれば」と期待を寄せている。

大坪さんも「私は年金をもらっていることもあり、生活するだけであれば民泊で収入を得る必要はありません。ですが、お客さんと話をしたり一緒に何かをしたりするのが本当に楽しいんです。お礼の手紙もたくさん来ます。楽しく働いて、収入もある。一緒に民泊を手掛ける仲間が増えれば、と思います」と話している。

Repo

五島列島B&B体験ルポ「かずおばんの家」

■ごく普通の一軒家にて

長崎県・新上五島町の南西部にある若松地区。町の玄関口の一つ、奈良尾港ターミナルから車で約一五分。林の中を伸びる道を進みました。

事前に道順を電話で聞いた際、「このまま進んでも大丈夫かな、という道を抜けてください」と言われていましたが、その通り道が次第に細くなっていきました。

しばらく進み、ある角を曲がるとそこに港が現れ、視界が一気に広がりました。「宿（しゅく）ノ浦」の集落です。

民泊「かずおばんの家」は、集落の奥にありました。入口に手書きの看板がありますが、ごく普通の一軒家。このような民家で、その家に住む人と一緒にご飯を食べたり、おしゃべりをしたり、順番でお風呂に入ったりするのが民泊での過ごし方です。

迎えてくれたのは、地元で観光ガイドもしているというこの家の浦本智子さん。「どうぞ、中に入って」と、にっこり笑った顔が素敵で、とても気さくです。

案内された寝室は海に面した和室。とても広々としていました。

荷物を置くと、さっそくおしゃべり。簡単に自己紹介したあと、民泊を始めたきっかけを聞きました。

五島列島B&B会長の大坪鷹子さんに「あなたもやってみない?」と声をかけられたことがきっかけで、八年ほど前に民泊を始めたとのこと。年間の利用客は、八〇人ほどだそうです。

五島列島B&Bの一つ「かずおばんの家」。

■作業中の漁師の傍らで釣り体験

「かずおばんの家」の「ばん」という言葉の意味を尋ねると

「地域の頼りになる兄貴分、といった意味の方言。目上の人に親しみを込めて使う場合が多いです」と教えてもらいました。ご主人の名前は、屋号の由来でもある一男さんです。

さっそく「かずおばん」がいるという作業場へ、智子さんに連れられて歩いて行くと、港の海の上に浮かんでいる小屋のようなものがありました。

地元で「屋台」と呼ばれている、海に浮かぶ漁師の作業小屋です。作業する際に、船から陸に荷物をいちいち運んでいると手間なので、作業小屋を海に浮かべるようになったそうです。来客時には、小屋の中でバーベキューをすることもあるそうです。

屋台に入ると「かずおばん」がいました。タコつぼ漁師だと聞いていたので「もしかすると気性の荒い人かもしれない」と少し身構えていましたが、とてもやさしい目をした人でした。

海上に浮かぶ「屋台」。

ヒオウギ貝の掃除をする浦本一男さん。

一男さんは、タコつぼ漁だけでなく、ヒオウギ貝という非常にカラフルな二枚貝の養殖も手掛けています。近くの海で何万個も養殖しているとのことで、この日は貝の殻についた別の小さな貝を、回転するブラシのような機械を使ってきれいに掃除していました。

民泊の大きな楽しみはその土地ならではの体験プログラムですが、「かずおばんの家」では、タコつぼ漁、釣り、クルージングなどを体験することができます。

僕は子どものころから釣りが趣味なので「釣り体験」を希望。一男さんが準備してくれた仕掛けを使い、さっそく屋台からアジのサビキ釣りを始めました。

この日は一一月初旬でしたがとても暖かく、光の差し込んだ海はエメラルドグリーンでとてもきれいです。

こんなに気持ちがいいのであれば、釣れなくてもいいな、とも思っていましたが、魚影が濃く釣り始めると瞬く間に小魚が集まってきて入れ食い状態に。お目当ての小アジをはじめ、小ぶりなメジナや、タイなどが次々と掛かり、休む暇もありません。

「自分は釣り名人なのではないか」と気分良くしていると、屋台の中でヒオウギ貝の掃除をしていた一男さんが「ほれ、こんなのが貝の中にいたぞ」と、僕の手のひらに何か細長い生き物を置きました。

何だろうとよく見ると、なんとタツノオトシゴ！　水族館でしか観たこ

色とりどりのヒオウギ貝。

とがなかったので、少し感動。くねくねと元気に動いています。写真を撮った後、「大きくなれよ」と、そのまま海に返しました。

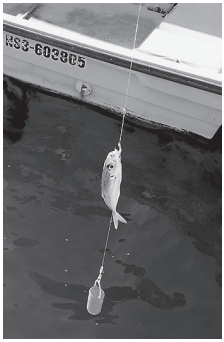
■家主との会話を楽しむ

間もなくお昼になったので、いったん家に戻って昼食です。アジフライが出てきましたが、これがホクホクとして最高の味。車を運転する予定もなかったので、一男さんと一緒に昼からビール。これも旅先ならではの贅沢です。

一杯やりながら、一男さんにも話を聞きました。もともと巻き網漁船に乗って働いていたそうですが、ハマチやブリなどの養殖業に転身。当時、養殖はとても稼ぎが良かったらしく、集落の多くの人が携わっていたそうです。

昼食後、屋台に戻り釣りを再開していると、浦本さん夫婦の友人で、五島列島B&B会長の大坪さんが「釣れますか?」と遊びに来ました。

少しやってみますか、と竿を渡すと、慣れた手つきでリールを操り、ぱっ、と仕掛けを海に落とし込み、瞬く間にアジを釣り上げました。さすが生粋の島人です……。島では、エプロンをした主婦が夕方、パパっと魚を釣り上げる場面も見かけます。



次々と釣れたアジ。

ヒオウギ貝から出てきたタツノオトシゴ。

感心していると、浦本さんの息子さんも顔を出したので、近海でどんな魚が釣れるのかなど情報交換。島で釣りをするには、地元の人の情報が必須です。近くの波止場でアオリイカが釣れるとのことだったので、アジ釣りを止め、アオリイカ釣りに挑戦することにしました。

屋台から波止場まで、大坪さんと歩いていきます。時刻は夕方に差し掛かっていて、西の空も赤く染まり始めていました。

アオリイカは、エギと呼ばれる疑似餌を使って狙うことにしましたが、大坪さんが「そろそろ時間帯もいいし、釣れますよ。それでは、夕食の支度のお手伝いに行ってきます」と言い残して離れていった途端、ググッと強い引き。慎重に巻き上げると、アオリイカが釣れていました。大坪さんの勘の良さ。さすがです……。

家に戻ると、夕食前にお風呂を借りました。浴場は、一般家庭にあるようなものですが、なぜか外に通じるドアがあります。

不思議だな、どうして風呂場にドアが、と思い風呂上りに聞いてみると、漁師の家は、海の仕事から帰ってきたとき、外からそのまま風呂場に直行できるようドアがある、とのことでした。「漁師さんの家はさすがうまくできているな」と感心。

夕食は賑やかなものとなりました。一男さん、智子さんと息子さん、さらに大坪さんも参加。

「ほらほら、ビール飲むなら自分で好きなだけ取ってきて」

深夜まで続いた宴。

宿では新鮮なお刺身が供されることもある。

カナに、家族の話から島の将来まで、ワイワイとおしゃべりに花が咲き、宴は深夜まで続きました。

と言われ、まるで自宅のようです。山盛りのお刺身をはじめ海の幸・山の幸をサ

■家族の一員として迎えられる家

翌日は、前日に釣ったアジも使って、かまぼこづくり体験です。

さばくアジは小さいので、包丁は使わず、すべて手でさばきます。頭を取り、指先を器用に使って身だけを取り分ける智子さんをまねしますが悪戦苦闘。なかなかうまくいかず身がボロボロになってしまいました。

きれいにはできませんでしたが、魚を手でさばくことが新鮮で楽しく、つい時間を忘れて夢中になってしまいました。

さばき終えたあと、アジの身に卵や砂糖、塩を混ぜこねてから油で揚げ、昼食に。ホクホクでプリプリのかまぼこは、もちろん無添加。材料から自分で調達したこともあり、格別な味がしました。

残ったかまぼこをお土産に、「また飲みにきます」などとお別れの挨拶をして、一泊二日の民泊が終わりました。

浦本さん夫婦と話をしていて一番記憶に残ったのは「一歩この家に入ったら、家族だと思って過ごしてね」という言葉。民泊がホテルや旅館と違うのは、まさに受け入れ先の家庭に、家族の一員として迎えてもらえることだと感じました。

居心地がよく、島の味覚に舌鼓を打ち、いろいろな話を聞けて、さらに島らしい体験も満喫できる。かずおばんの家へ来る人はリピーターがとても多いそうですが、その理由が分かった気がしました。

かまぼこ用に小アジを手でさばく。

竹内　章（たけうち あきら）
1974年生まれ、富山県出身。元中日新聞社記者。2015年、長崎県新上五島町に地域おこし協力隊として移住し活動。昨年3月に任期を終え、離島在住のフリーライターとして屋号「ツムギヤ」で独立し活動中。